

2017年7月16日

福音書からのメッセージ

茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。

(マタイによる福音書 13 章 22 節)

たとえには、二つの面があります。一つは難しいことを、わかりやすいように説明することです。今日の種蒔く人のたとえですと、絵本などにもしやすく、聞いた人も自分の心は四つの土地のうちどれだろうかと考えるでしょう。わたしたちは聖書を通して、種はみ言葉であり、種を蒔く人は神さまだと理解していますのでそう簡単に考えます。しかし当時の群衆はそこまで理解できていたのでしょうか。

さて、聖書日課の中で読まれなかった10節から17節の「たとえを用いて話す理由」も一緒に読んでいくと、ある事実気づかされます。それは10節以降の部分では、そこには18節からの「種を蒔く人のたとえの説明」も含まれますが、イエス様は舟の上の人たちだけに語られたということです。岸边にいた群衆には、18節以降のイエス様の言葉は届かなかったのです。

イエス様は舟に乗って、このたとえを語り始めました。普通は群衆から少し離れた舟の上から語ることで、言葉をはっきりと伝えようとしたのだと想像します。しかしこのようにも考えることができるのです。イエス様は群衆との間に距離を置き、舟の上にいる人にだけ秘密を語られたのだと。

岸边にいた群衆が耳にしたイエス様の言葉は、種が蒔かれた土地によって、育つこともあればそうでないこともある、そこまででした。良い土地に落ちた実は、たくさん実を結ぶ。農業を営んでいる人たちにとっては、当然のことです。でもそれが一体何を意味するというのか、まったくわからない。これがたとえのもう一つの面、「謎」、「覆われたもの」というものです。



このように考えると、わたしたちの関心は自分がどの土地なのかということではなく、別のことに移っていくのではないのでしょうか。それは、わたしたちは果たして

どこでこのたとえを聞いているのかということ。イエス様と一緒に舟の上で聞いているのか。それとも群衆のように、岸边で聞かされているのか。

人々はイエス様を見て、その言葉を聞いていました。でも目を閉じ、耳を塞いでしまう。み言葉に背を向け、受け入れない。そして人々はイエス様の乗る舟に乗りこまずに、少し離れたところでただの傍観者になることを選択したのです。

わたしたちはどうでしょうか。み言葉の種をせっかく受け取りながら、見もせず聞きもせず、無駄にしてしまう。そのようなことはないでしょうか。

イエス様のおられる舟に乗るとということ、それはイエス様に従い、イエス様に身を委ねるとことを意味します。良い土地になることも同じです。

わたしたちは今、イエス様と共に舟に乗っているのでしょうか。この固く閉ざされた心を、神さまあなたが耕してくださいと、心を差し出しているのでしょうか。

神さまは今も、み言葉の種を蒔き続けておられます。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>